
俺は俺を殺すお前を生かす

市村 鉄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺は俺を殺すお前を生かす

【Nコード】

N0588Z

【作者名】

市村 鉄

【あらすじ】

右眼を眼帯で覆った剣士・アルヴィスは、一年間隔で訪れる『呪われた力の暴走』に危惧しながら世界各国を転々と旅をしていた。そんな彼の前に帝国兵から必死に逃げる少女・カルラが現れる。彼女を助ける代わりに、ひとつだけ頼みを聞いてもらうという条件でアルヴィスは彼女を助ける。一方、託宣によってカリエスコ帝国が八人の戦士によって滅ぼされると告げられた皇帝・クロノスは、その戦士の先頭に立つ可能性のある者を片っ端から排除していく。アルヴィスとカルラの二人は帝国からの刺客をやりすごしながら仲間

を集め、帝国と立ち向かうことを決意する。

過去

少年が父と母の本当の息子ではないと教えられたのは、彼が九歳のときだった。

まだ赤子同然だった彼は、誰一人として住んでいないはずの荒野で、静寂を嫌がるように大声で泣いていたのだという。

そこを馬車を引いた商人の男が偶然通りかかると、泣いている彼を不憫に思い自分の村まで連れて帰り、妻と共に我が子のように育てたのだそうだ。

すくすくと健康に育った少年は血の繋がらない父と母を愛し、彼らもまた血の繋がらない息子を愛していた。

血が繋がっていないことを打ち明けられても少年の気持ちはたいして揺らぐことはなかった。

自分を捨てた両親の記憶は一切なかったし、なくてよかったと思った。おかげで自分の両親はこの二人なんだと思いつけることができたのだ。

父と母との別れが訪れたのはその三年後であった。

満月がその青白く輝く光であたりを満遍なく照らす晩、彼らの住む村は突然に襲われた。

静けさが途端に悲鳴と罵声で溢れ、村は瞬く間に火の海と化した。

父と母は恐怖に震える少年を部屋の奥にある物置に隠し、ただただじっと目を瞑り、手を組んで祈っていた。

家の扉が乱暴に開け放たれる音が聞こえ、同時に下卑た男達の笑い声が少年の鼓膜を震わす。

父の懇願するような声が、次に知らない男の声が聞こえ、続いて何かが倒れるような音と同時に母の悲鳴が聞こえた。

嫌な予感がする。

少年は勇気を振り絞り、恐怖で固まってしまっている筋肉に精一杯の指令を出して物置の戸を少しでも開けた。

知らない男が数人、歯を剥いて笑っている。手には皆、剣を持ち、身体は鋼の鎧で覆われている。

少年は一番手前に立つ男の足元に目をやり、息を呑む。

(……父さん?)

父が血まみれで倒れ、その隣で母が泣いていた。

少年は思わず声を上げそうになったが、できなかった。混乱し、声の上げ方がわからなかったのだ。

父を殺したであろう男が剣についた血を振り払い、母にその剣先を向け、何かを話しかける。しかし母はすぐに首を横に振る。

すると男はいやらしく口角を吊り上げ剣を手にした右腕を振りかざすと、母に向けて一気に振り下ろした。

あたりに赤い液体が飛び散る。

その中心でうずくまる母はピクリとも動かない。

「あ、ああ、あああああああ!」

少年は震えながら絶叫していた。

怒りが、憎しみが、そして悲しみが少年の身体を熱く包み込んでゆく。

吐き気がするほどの不快感が腹の奥にずしりとのしかかる。本当に吐いてしまいそうな感覚に包まれたとき、少年は意識を失った。

人が目の前で死ぬのを初めて見たのは少年がまだ十二のときだった。

そして、少年が人を殺したのもその日が初めてであった。

〔託宣〕

「リア殿下が託宣を授かったというのは誠か!？」

宮殿内を慌しく走り回る神官の一人をつかまえて元老ドルウクは早口に問いかける。

いきなり腕をつかまれた神官の男は眉をひそめながら億劫そうに振り向いたが、ドルウクの顔を見るや否やその顔を正し深々と頭を下げる。

「ドルウク様でしたか。託宣が下ったのは確かです」

頭を上げドルウクの目を見てはつきりとした口調で答えた神官は「……ですが」と言うと、目を伏せ何事かを逡巡するようなそぶりを見せる。

「なんだ？ 何かまずい未来なのか？」

いまだに目を伏せる神官に対してドルウクは少し声を落として問いかける。

「それが、この内容に関してはまだ誰にも告げるなと皇帝陛下が申されまして。陛下自らみなさんに告げる故、我々は元老様方と大將軍閣下を宮殿にお呼びするよう申し付けられました」

申し訳なさそうにそう話す神官に「そうか」とだけ言い、自分の仕事に戻るよう促した後、ドルウクは謁見の間を指して足を進め始めた。

元々、ドルウクがこの宮殿を歩いていたのも皇帝の召集を受けてのことであった。その際、伝令役の使用人は託宣が下ったとだけ言い残し、去っていったのでその内容までも聞けていなかった。

（まあ、問うたところで先と同じ返答だったであろうがな）
（しかし、大將軍まで召集されるとは、戦争でも起きるのか）

託宣の内容を軍人が皇帝の口から直接耳にするなんて事態は前代未聞である。そのうえ神官どもの狼狽ぶりを見れば嫌でも悪い予感が頭をよぎる。

謁見の間の扉を開け、ドルウクは足早に中に入っていく。扉の側から奥へと伸びる長方形のテーブルの周りに用意された二十一の椅子は他の元老たちで既に半分近く埋まっていた。普段はテーブルも椅子もなく、ただただ広いだけのその部屋がやけに窮屈に思えた。ドルウクはその並べられた椅子の一番奥の席に腰をかける。といっても実質の一番奥の席は皇帝陛下が座るであらう玉座なのだが。

ドルウクの入室後まもなくして用意された席がすべて埋まった。最後に入ってきたのは大將軍コーネリウスであった。

きれいな顔立ちに鋭い目、背中まで伸びる長い艶のある黒髪をすべて後ろにまわし、それを編んで一本の束にしていた。大將軍という地位は産まれに関係なく、その実力と人間性のみを評価され就くものである。齢二十五で軍隊の頂点に就くという異例の出世を成し遂げたコーネリウスだが、その実力は本物であることは確かだ。

しかし、彼が呼ばれていることを聞かされていない元老たちは皆、訝しげな表情でその男をねめ回す。

カリエスコ帝国では元老院と軍隊は友好な関係とはお世辞にも言えなかった。

そんな視線を無表情でやり過ごし、その男は唯一空いていた一番手前の席に腰を下ろす。

少しの間があり、元老たちはそれぞれ眉をひそめてひそひそ話をしていたが、ドルウクたちが入ってきた扉とは反対の側から、数人の侍従を連れた男が入ってくると皆が表情を引き締める。と同時に一斉に椅子から腰を浮かし、膝を床につけ頭を垂れる。

カリエスコ帝国の皇帝クロノスだ。

口ひげを蓄えた壮年の男で、黒い髪を短く刈り、派手に着飾った衣装の上からでもはっきりとわかる太い首と、それに見合ったごつい身体。

見た目だけでいえば皇帝というよりも軍人のほうがよっぽど似合う。だがその男の放つオーラは人並みではないことを、ドルウクは今まさに再確認させられていた。

「よい。座ってくれ」

口を開いたのはクロノスだ。

腹に突き刺さるような低い声でそう言うと、他のそれよりは明らかにクッション性に優れているであろう派手で大きな玉座に深く腰を下ろした。

それを確認してからドルウクをはじめとする他の者達も腰を下ろす。

「さて、すでに知っておると思うが、今回皆を招集したのは先日フォルトウナ様より承った託宣についてだが」

帝国国民が崇める唯一にして絶対の神・フォルトウナ。

幸運の女神として信仰されるフォルトウナは年に数回、託宣の巫女の夢に現れ、未来を伝える。その巫女というのがこの国の皇后・リア殿下なのである。

「この国に存続の危機が訪れるそうだ」

淡々と、危機感を感じさせない口調で話すクロノスの言葉の意味を理解するのに数瞬かった。

そしてそれを理解した上で皆、眉をひそめて次の言葉を待つ。

謁見の間において、皇帝陛下の御前で許しなしに発言することは禁じられている。つまり、許しが出ないということはまだ陛下の話は続くということでもあるのだ。

それを妨げる愚か者はここにはいない。

ドルウクをはじめとする二十人の男たちは逸る気持ちを抑え、次を待った。

「フォルトウナ様曰く、

『月が赤く染まり、大地を焦がさんと照らす晩、この国は八人の戦士とそれに導かれる者達の手によって滅びるだろう。戦士達の先頭に立つは、死を食らう冥界の王の力を右眼に宿した青年と、穢れなき心を持って魔人族を率いる少女である』ということだ」

クロノスが託宣の内容を変わらない調子で読み終えると、周りの者が一斉に息を呑むのがわかる。

魔人族。

姿かたちは人間のそれと変わらないのだが、彼らには特別な力が備わっていると昔から言い伝えられ、恐れられていた。それは神をも殺す力として……。

情報が確信を得ていないのは、今を生きるほとんどの人間がその存在を、そしてその特別な能力を見たことがないのだ。しかしその存在を肯定するものも少なからずこの帝国には存在している。

彼らは我々人間がなかなか足を踏み入れることのない高地や、森

林、沼地などに集落を作って生活しているらしい。

（しかし、今まで我等に干渉してこなかった種族がなぜ……）
ドルウクは眉をひそめる。

（それに魔人族と共に先頭に立つという剣士とは一体）

「我等を敵に回すとは愚かなことである。それを世に知らしめる良
い機会ではないか」

不敵に笑うクロノスが沈黙を破る。

堂々とした声とその迫力はドルウク達の不安を一掃した。

暴走

いつもそうだ。

鼻をつく死のにおいで目が覚め、手に嫌な生温かさを感じ、重たい身体に鞭打って上半身だけを起こし、自分を中心に広がる惨状を目の当たりにし、息を呑む。

まるで、この世には自分しか存在しないのではないかと錯覚してしまうほどの静寂に身を包みながら、右眼を真っ黒な眼帯で覆った少年・アルヴィスは徐々に落ち着きを取り戻してゆく。

右手に握り締めた剣はその漆黒の刀身を紅に染めていた。

「また、か……」

夜の闇に消え入ってしまいそうなほど彼の声は小さく、そして悲しみに満ちたものであった。

天に浮かぶ満月が青白い光を遠慮がちに浴びせてくる。

アルヴィスはしばらく座ったまま動く気配を見せなかったが、一度大きく嘆息するとひざに手を当てながら立ち上がった。そしてあたりに転がる死体を一つ一つ確認するようにいちいちしゃがみこみ、その顔を見てまわる。時折、目を剥いたまま事切れた死体の瞼を手で閉じてやりながら。

途中、自分が旅に持ち歩いている荷袋が落ちているのを見つけた。中身を確認し、紐を肩にかけて再び作業に戻る。

死体は全部で二十程度であった。そのどれもが皆、屈強な体をした男で、手には武器を握り締めていた。

自然と溜め息が漏れ、はっとする。

（俺は今、安堵したのか？）

（こいつらは命を落として当然だと、そう思ったのか？）

どうにもならない疑問で頭の中をこね回し、嫌悪感に襲われる。

ガイウス。

このグランディア大陸の大半を支配下に置くカリエスコ帝国の手が及ばない土地で盗賊団を結成し、力を持たない村や行商人などを狙って襲う者達の総称としてそう呼ぶ。

アルヴィスの周りに転がっている死体は恐らくすべてそのガイウスである。

彼らに出会ったのはただの偶然だった。

力の暴走の日が近いのを悟り、村で大量の保存食を買占め、誰にも会わずに済むように人気の無い荒れ果てた地で時が来るのをじっと我慢していた。

それなのに、よりにもよって暴走の当日、ガイウスの連中に出くわした。

少し何かを会話した気がするがほとんど何も覚えていない。

意識が途切れ、目を覚ましたときにはこの有様だ。

月を仰ぎ、少し攻撃的に吹く風に身を浸す。脇腹に浅い傷があり、血が胴衣を濡らしていくのがわかった。傷自体はたいした痛みではなかったが、生温かい液体が肌を伝うこの感覚は嫌いだった。

自分の荷袋から純白の包帯を取り出し、傷を覆うようにしてぐるぐると巻いていく。何周か回して血が滲まなくなったなら、それを干切って肌と包帯の間に食い込ませて固定する。一連の作業を慣れた手つきでこなし、再び荷袋を担いでアルヴィスは歩き出した。

しばらく歩いていると空が白み始め、陽が今にも頭を出さんと彼方の稜線が輝き始める。

アルヴィスには行く当てなどなかったが、今までもそうやって適当に歩き辿り着いた村や街で適当に金を稼いで生活をしていた。普通に働くこともあったが、剣の腕には少なからず自信を持っていたので、時には賞金目当てで剣闘大会に出場したり、またその腕を買わせ、貴族の護衛としての任に就いたり、様々なことを経験してきた。

しかし一年以上同じ地に足をとどめておくことは絶対になかった。

力の暴走はおよそ一年周期で訪れる。

意識が飛び、無差別に周りの命を奪い、殺し尽くして意識が戻る。アルヴィスにとっては悪夢以外の何ものでもなかった。

しかし、殺す者がいなければこの暴走も起こらない。正確には暴走が起こつてすぐに意識が戻るわけだが、この場合も後の一年間は安心できる。

暴走はアルヴィスの持つ力のマイナスの部分でしかなく、真の力は別のものであることを彼は身をもって理解していた。しかし、その力もまた彼を悩ます要因の一つになりつつあった……。

（遭逢）

歩き始めて半日ほど経っただろうか。

夜明けと共に歩き出し、途中、大きな水溜りで血のついた服を洗ったぐらいで、ほとんど休むことも無く地を踏み進め、今では陽の最後の破片が押し潰されようとしている。いつの間にか足元はごつごつとした荒地から、夏草の生い茂る緑の地へと変わっていた。

アルヴィスは一度大きく息をつくと足を止め、近くの喬木に背を預けて座り込む。

（さすがに疲れた）

（……今日はもういいか）

疲れきった身体が重力に抗うのをやめてだらしなく垂れる。

陽は完全に沈み、それを待っていたかのように夏虫たちがきれいな音色を奏で始める。いや、陽が沈む前から鳴いていたのであろうが、歩きながらではあまり気を引くものではなかったのだろう。

火を焚くための枯れ木を探しにいと立ち上がろうとしたとき、暗闇の奥で草を踏む音が聞こえた。

左眼だけで半眼を作って音のほうへと視線をやる。

（一人？……いや、後ろに大勢いる）

（……追われてるのか？）

立ち上がりかけた体勢のまま、アルヴィスは腰の剣に手をかける。ひとつの気配がどんどん近づいてくる。鞘から漆黒の刀身が少し顔を出し、月の光を浴びて輝きを放つ。

刹那、草を掻き分けて影がひとつアルヴィスの前に転がり込む。比喻ではなく、文字通り地面に顔出した木の根に豪快に蹴躓いた少女が、小さな悲鳴とともに転がってきたのだ。

その光景に啞然として剣を抜きかけた状態で固まってしまふ。少女は一瞬痛みに顔を歪めていたが、アルヴィスの存在に気づくと、はっとした表情を作りあわてて立ち上がった。

青白い月の光に濡れる少女はアルヴィスよりも一回りほど小さく、栗色の髪は、腰まできれいに伸びた後ろ髪と、肩にかかるかどうかの横髪に結ばれた真っ白なりボンが特徴的であった。アルヴィスを警戒するように見つめる大きな瞳はすこし潤んでいるように感じられた。

何を言うつもりだったのかはわからないが、アルヴィスが口を開けようとした瞬間、嫌な気配を感じ、思いとどまる。

殺気だ。

(……囲まれた)

(というより、巻き込まれた……)

意識を失っていても暴走では身体は動いている。つまり昨日からアルヴィスの身体は一睡もしていないのだ。疲れきった身体を一刻も早く休めたいアルヴィスは心底気が滅入った。

鞘から剣を抜ききって両手で持ち右足の前に剣先を構える。目の前の少女が息を飲むのが分かった。

「ああ、心配すんな。別にあんたを斬るつもりじゃないから」「え?」

案の定、少女は囲まれていることに気づいていないようで、アル

ヴィスの言葉に目を丸くする。

「あなたは……」

少女が何かを言いかけたが、それに応える余裕は無かった。アルヴィスは一瞬で少女との間合いを詰め、それを受け止める。

金属と金属がぶつかり合う音が夜の暗闇にこだまする。アルヴィスは顔の正面で刃を噛ませながら相手を左眼で鋭く睨む。全身を闇色のローブで覆い、フードを深々と被った男が立っていた。

「穏やかじゃないね、どうも」

「邪魔立てするなら貴様も命は無いぞ」

しゃがれた男の声は不快にアルヴィスの鼓膜を揺らす。

「俺を殺す、か。この人数で？」

アルヴィスは不敵に笑い、「もつとも、何人連れてきても無駄だろうけど」と小声でつぶやく。

もう一度金属音がこだまし、男が後ろに跳び下がる。男が剣から右手を離し、その腕を小さく持ち上げると暗闇から鋭い殺気を放った影が二つ飛びかかってきた。

一撃目を受けたときから呆けたままの少女を左手で自分の正面に引っ張り込むと、アルヴィスは腰に差した鞘を左手で抜き取り、少女を左眼で見据えたままその手を振りかぶる形で後方からの斬撃を受け止める。間髪いれずに左から別の影が少女を狙って突きを放つ。剣を持つ手で少女の服を掴んで引っ張ると、同時に漆黒の刀身が一閃し、影が地面にうずくまる。

まず一人。

剣を振るい、身体を捻ったことで、後方の敵を受け止めていた鞘

から重みが消える。今まで鞘で受け止められていた男は飛び下が
り距離をとる。と、同時に突きを放った男とは反対の闇からもうひと
つ殺気が飛び出す。アルヴィスはそれに気づかないふりをし、ぎり
ぎりまで引き付けて一瞬で薙ぐ。

二人目。

アルヴィスは最初に襲ってきた男を正面に見据える形で仁王立ち
する。足元にはうずくまった影が二つ、隣には未だ目を丸くする少
女、後方には影が一人、姿を見せていない殺気がまだいくつか感じ
られた。

(守りながら戦うには片目じゃしんどいか……)

(そもそも俺はなんでこいつを守るんだ?)

もったもなことを思い出し、不意に笑みがこぼれ、少女が眉をひ
そめる。

(ま、別にいいか)

「さて、あんたらまだやんの？」

正面で微動だにしない男に向かって声を投げかける。

男は答えなかった。代わりに再び右手を掲げると、暗闇から殺気
を纏った影が三つ現れ、アルヴィスと少女は文字通り囲まれる形に
なった。

相手に全く引く意思がないとわかると、アルヴィスは大きく嘆息
した。そして右眼に被る眼帯の紐を解くと、はずした眼帯を少女に
預ける。

「ちょっとこれ持ってろ」

少女の顔を見てそう言うアルヴィスの右眼を見つめ返し、少女は

息を呑む。

アルヴィスの右眼は、茶色の瞳をした左眼と違い、まるで獣のそれを思わせる澄んだ紅の瞳をしていたのだ。

「あ、あの、その眼は……」

おどおどしながら少女は声を絞り出した感じだった。

その言葉をアルヴィスは聞こえていたが応える余裕はなかった。五つの影が一斉に剣を手に襲ってきたのだ。

アルヴィスは左手の鞘を地面に放ると、その手で少女の手を掴む。少女の手を引っ張りながら敵の斬撃を避け、一人ずつ、確実に倒していく。視界が広がったことで先ほどの戦闘とは天と地ほどの差があった。

途中、少女が危ない場面も数回あったが、それでも全員倒すのにそれほど時間はかからなかった。

対話

「あ、あの！」

勢いよく燃え盛る焚き火の向こう側から、おどおどした様子の声が飛んでくる。

「ん？」

アルヴィスは、以前滞在していた街で買い込んだ干し肉を頬張りながらその声の主に目をやる。

カルラと名乗ったその少女は、分けてやった干し肉を持った両手に視線を落としてもじもじしていた。

「助けてもらっておいてこんなこと言うのは失礼だと思うんですけど……」

そこまで言って口ごもる。

「いいよ。別に怒ったりしねーから」

半ば呆れ返った口調で先を促す。

謎の集団に襲われてから、とりあえず場所を移すまでの間、カルラの話し方はずっとこの調子であったので、結局まだ彼女の名前しか聞けてなかった。

お互い聞きたいことが無いはずがなかった。少なくともアルヴィスの方には聞きたいことがいくつもあった上に、眠気もあったので、いちいちこの不思議な空気を作られるのは好ましくなかった。だが、それを注意しても逆効果にしかない気がしたので、カルラが慣れるまでこのやり取りに付き合うことにした。

「……ど、どうして私を助けてくださったんですか？」

「そりゃあ、あんたが俺の前で派手にすっころんだせいだ。あのまま普通に通り過ぎてくれれば俺は助けなかったんじゃないかな」

冗談口調で話したが、嘘ではなかった。元々、正義感も好奇心も

強くないことは自負していたし、何より疲れていた。わざわざ追いかけてまで首を突っ込む気は起きなかっただろう。

ただ、目の前で女の子が殺されるのを眺めていられる度量は持ち合わせていない。それだけである。

それをどう受け取ったのかは知らないが、カルラは自分がこけたことを思い出したのだろう。頬を赤く染めて俯いた。

「で、次は俺の質問な。お前は どうして追われてたんだ？」

カルラをこのままにしておいたら永遠に話が進まない気がしたので強引に意識をこちらに引き戻す。作戦は成功したようで、カルラは顔を上げ話し始めた。

「え、えと、あの人たちは帝国の刺客さんなんです」

「帝国？ 何やったらあんたみたいな女の子にあんな物騒な連中仕向けるんだ？」

アルヴィスは半眼を作ってカルラの次を待った。

カリエスコ帝国は世界トップクラスの軍事国家だ。国土と兵の数にものを言わせ、今まさに世界統一に繰り出そうとしているような国が、こんな女の子一人にかまうだろうか。

（しかし、帝国軍ならあの集団の連携のよさも納得できるか）

（やっぱり殺しておくべきだったか……）

アルヴィスは彼らにとどめをささなかった。全員満足に動ける傷ではなかったし、殺しはもう懲り懲りだった。

しかし相手が誇り高き帝国軍となれば、邪魔立てしたとして自分も狙われる可能性が生まれるのだ。ただでさえ悪目立ちする特徴を抱えているのに、お尋ね者などになれば目も当てられない。

今更どうにもならないことを頭の中でこね回していると、カルラが口を開く。

「何もやってないんですが、これからやるそうなんです」

「……ん？」

アルヴィスは眉をひそめる。

「わ、私も詳しくは知らないんですけど、た、託宣とかいうので出たらしいんです！」

眉をひそめた顔が怖かったのか、カルラは慌てた様子で両手を前でぶんぶん振りながら話す。しかし、その奇妙な行動には目もくれず、アルヴィスは顎に右手を当て考える。

託宣。

アルヴィスには聞いたことがあった。なんでも、神のお告げが聞こえる巫女さんが未来を予見するってぐらいの知識なのだが、おそらく間違っただけはないだろう。

託宣が覆った話は今まで聞いたことが無かった。つまり、今日アルヴィスが彼女を助けるのも事前に決まっていた運命ということになる。

（胡散臭い話だな）

「で、その内容とか聞いたのか？」

視線をカルラに戻し、できるだけ怖がらせないように落ち着いた口調で尋ねる。

しかし、カルラは弱弱しく首を横に振ってから、俯いて「ごめんなさい」と消え入るような声で謝った。

謝る必要は無い、と微笑んで見せるとカルラの顔が少し明るくなった。

焚き火が散らす火花の音が心地よくアルヴィスの鼓膜を揺する。

「あ、あのお」

炎を見つめながら、特に何も考えずぼーっとしていたアルヴィスはその視線をカルラに移す。

「なんだ？」

「脇腹、怪我してませんか？」

一瞬何を言われているのかわからなかったが、自分の脇腹を見て理解する。裂けた布の隙間から血の滲んだ包帯が顔を出していた。

「ああ、大丈夫。もう血は止まってるから」

「少し見せてもらっても良いですか？」

そう言ってカルラは立ち上がり、アルヴィスの隣に膝をつく、両手を傷口にかざして目を瞑る。特に嫌がる理由も無いので、アルヴィスはその様子を怪訝そうな表情で見つめていた。

すると突然、カルラの手元が黄金色に輝き、傷口が妙な暖かさに包まれた。光が消え、カルラが手を離すと傷の痛みが完全になくなっていった。

不思議に思い、上着を脱ぎ、包帯をはずしていく。完全に包帯をはずしきるとアルヴィスは目を丸くする。傷が跡形も無く消えていたのだ。

「これは一体……」

傷のあった箇所を手のひらで何度も確認しながら隣のカルラに視線をやる。

「私、魔人族なんです」

そう答えたカルラは満面の笑みで、アルヴィスが見た彼女の最初の笑顔だった。

～交渉～

薫る夏草と小鳥達の鳴き声で目が覚めると、陽はすっかり昇りきり、その過ぎた恩恵を、揺らめく木の葉の隙間を縫って、アルヴィスの虚ろな瞳に容赦なくぶつけていた。

眩しさに顔をしかめながら、未だ若干だるさの残る身体を起こすと、いつも通りはねた黒い髪を搔いて、昨日の焚き火の跡を半眼で眺める。

(……寝すぎたか)

(疲れてたんだ、しょうがないか)

朝は特段弱いというわけでもなかったが、昨日いろいろありすぎたせいか、脳が眼を覚ますのに少々時間がかかった。

(力の暴走があって、おかしい奴が現れて、そいつを狙うおかしい奴らと戦って、おまけに魔人ときたもんだ……)

「カルラ!？」

ようやく脳の機能が正常に戻ったアルヴィスは無意識にその名を呼んでいた。

「は、はい!」

直後に、すぐ隣で座ったまま驚いたように肩をびくつかせたカルラが裏返った声で返事をする。その姿を確認するとアルヴィスは大きく息をついて安心し、小さく苦笑する。

「そんなとこでなにしてた?」

左手で眼帯の着いていないほうの目を擦りながら、首だけを捻ってカルラを見る。

「えー!? ええっと、その、アルヴィスさんがなかなか目を覚まさないで寝顔を拝見させてもらってました」

そう言ってカルラは照れくさそうに目を伏せる。

(他人の寝顔見て何がおもしろーんだ?)

アルヴィスは呆れたように息をつき、ゆっくりと立ち上がった。

「近くに川あったよな? ちょっと顔洗ってくるわ」

そう言ってゆっくりと歩き出すアルヴィスの後ろを、カルラがひよこひよこことついて来る。怪訝な顔で振り返り、カルラに無言で問いかける。

「私も一緒に行きます」

屈託の無い笑顔でそう言うカルラを拒む理由も無いので、わかった、の意味を込めて右手を軽く挙げる。

(なんなんだ? 懐かれたのか?)

そんなことを考えながら半眼を作ってもう一度カルラを振り返る。その行動の意図が分からないカルラは、眼を丸めて首を傾げる。その様が以前、アルヴィスに懐いていたリスのそれと重なって見え、苦笑する。

(勘弁してくれ……)

「で、お前これからどーすんだ?」

濡らした顔をタオルで拭いながらアルヴィスが尋ねる。

「村、焼かれちゃったんだろ？」

すぐに答えが返ってこないのを確認し、付け足す。しかし先ほどより、僅かに声のトーンが下がったことに自分でも気が付いた。

カルラは昨晚、自分が村を出たときの話を聞かせてくれた。

帝国が軍を出撃させ村を襲撃したこと。数で圧倒され、なすすべなく村は焼かれ、民は殺されたこと。族長の娘であったカルラを種族の誇りと尊厳にかけて死なせるわけにはいかない、と皆が自分だけを逃がしてくれたこと。

そして、自分は村のみんなの想いを無駄にしないためにも、立派に生きるのだと。

「そのことでひとつお願いがあるんですけど……」

言い淀むカルラの顔を怪訝な顔で見つめて、次を待った。

「わ、私を守ってくれませんか!？」

「断る」

文字通り即答だった。アルヴィスは昨晚の話を聞いて、もしかしたらとは思っていたが、お願いがあるなどと改まって言われれば、大体想像はついていたので即答が可能だったのだ。

自分の頼みを言い切ったことで即答に反応できなかったのだろう。カルラは懇願するような顔をやめようとしなない。

アルヴィスは一度嘆息し、再び口を開く。

「だから、断る」

今度ははっきりと伝わったようで、カルラが狼狽する。

「え!？」 断るって、ど、どうしてですか?」

考えられないといった様子で問うカルラを呆れた顔で見る。

「逆に断る理由はいくらでもあるけど、受ける理由がねーよ！」

（一体俺をなんだと思ってやがる）

呆れ過ぎて苦笑が漏れる。

「で、でもっ、昨日は殺されそうなところを助けてくれたじゃないですか！」

カルラの言葉に少し熱がこもるのがわかった。

「あれは仕方なく、だ。それに今回は昨日とは状況が全く違うだろうが」

あまり口論が激しくなるとカルラが泣いてしまいそうなので、とにかく落ち着いた声で返すことに気をつける。感情をなるべく表に出さないようにするのは幼少期から自信があった。

「状況は一緒です！ 私が狙われていて、私の前にアルヴィスさんがいる」

しかしカルラの口調は強まっていく一方だった。

「それじゃあ聞くが、今回の終わりはどこだ？ 俺に帝国を潰せとでも言う気か？」

「それは……」

カルラが言葉を詰まらせる。

アルヴィスは多少の罪悪感に苛まれたが、この判断は致し方なかった。

暴走は今までは約一年間隔で起きていたが、今後もそうであり続ける確証などどこにも無い。その上、これまでの一年というのにも前にずれたり、後ろにずれたりで、不安定なものであった。

（俺がそばに居ちゃ、守るどころか殺しかねえ）

（笑えない話だな、まったく）

アルヴィスは目線をカルラの方にやると、ひとつ大きく息をつき、今にも泣き出しそうな少女の頭に軽く右の手のひらを乗せる。

「そんな心配すんな。しばらくは傍に居てやるから」

「え？」

目を丸くして顔を上げるカルラの瞳は少し潤んでいた。

（どうにもこの表情には慣れん）

「とりあえずどこかの街か村に入れば身を隠せるだろう。そこで腕の立つガードでも雇えばいい」

富も権力も無い少女のために、帝国などという強大な敵を相手に誰が戦ってくれるというのだろうと思うと、アルヴィスは胸が締め付けられた。

しかし、そんなアルヴィスの気持ちとは裏腹に、カルラは顔に満面の笑みを浮かべている。

「はい！　ありがとうございます。やっぱりアルヴィスさんは良い人です」

純粹無垢な笑顔でそんなことを言われ、アルヴィスは心の奥で深いため息をつく、気持ちを切り替えた。

「そんじゃまあ、まずは街探しだな」

「はい！」

報告

カリエスコ帝国の首都・バスコにそびえる王城は、帝国の威厳そのものを象徴したかのような広大さであった。

その王城の北西部に、元老ドルウクの住居なる一室が存在する。あくまで王城における住居であり、貴族の出である彼の屋敷は、バスコより少し東にいったところにあるコルネロという街にあった。

（久しく帰ってないな……）

目を通し終えた書類の束をまとめながら、ふと故郷のことを思い出す。

ドルウクにはじきに五歳になる孫娘がいた。ハンナと名づけられた孫娘はドルウクによく懐いていたし、彼もまたハンナを溺愛していた。しかし、帝国滅亡の託宣が下されてからひと月、元老院にその身を置く者達は業務に追われ、日々進展の無い会議を繰り返すばかりであった。

（この調子ではハンナの誕生記念にも行ってやれんな）

ランタンの淡い光を見つめながら大きく嘆息する。

不意に、扉をノックする音が部屋に響く。不規則なテンポで奏でるその音は、扉の向こう側に居るのがただの客人でないことを意味していた。

ドルウクは立ち上がり、扉のすぐ前まで近づくと、扉越しに低い声で話しかける。

「何かあったか？」

扉の向こう側から少し間をおいて反応がある。

「影をすべて回収いたしました。いくつか深手を負っておりますが、

すべて命に別状ございません」

ドルウクよりも低く小さい、しかしはっきりとした口調の男の声が返ってくる。

「失敗か？」

「はい。なんでも右眼を眼帯で覆い、漆黒の剣を操る若い男にやられたと」

再び少し間を空けてから、変わらない調子の声が返ってくる。

（右眼に眼帯の男、か）

「そやつはなにか特別な力を使ったか？」

「いえ、そのような報告はございません。ただ、眼帯をはずした際の動きは相当のものであった、と」

ドルウクは顎に蓄えた白ひげを触りながら、「ふむ」と小さくつぶやく。

「それで、行方は掴んでおるな？」

「はっ。」

今度は間を空けず、答えが返る。

「奴を使え。次こそは確実に息の根を止めよ」

ドルウクの口調にこそ変化は無かったが、その声には脅しという名の殺気がこもっていた。

「御意に」

音も無く扉の向こうから気配だけが消える。

ドルウクは大きく息をつくと、書類が山積みの机の前まで戻り、椅子に深く腰掛けた。

（眼帯の男はおそらく託宣の男で間違いない）

（影を七つも倒し、さらにまだ力を秘めるとは厄介な男よ）

（軍神）

沈みかかった太陽の下、職人の歌声や店の呼び込み、飲食店の中から聞こえる爽快な笑い声が心地よく聞こえてくる。

「賑やかな街だな」

アルヴィスは真珠色の敷石の街路を歩きながら、隣で声なき感動をその表情で表して、きよろきよろと目を踊らすカルラに声をかける。カルラは口をあけたまま首を何度も縦に振る。その様子を横目に見ながらアルヴィスは小さく微笑む。

カルラはこの街に入る前、自分はニョヒラ——カルラが生まれ育った小さな村の名前らしい——を出たことがないと話していた。

マクガロン公国と呼ばれる、グランディア大陸の北西部に位置する小国の、東の端にあるこの街の活気は、世情を知らぬカルラの無垢な心を躍らせるには充分なものであったらしい。

「まずは宿を見つけて、それから飯だな」

連日まともな食事をしていなかったアルヴィスは、右手を自分の腹部に当てて声をかける。カルラは忙しなく視線を撒き散らすのを止め、アルヴィスの声に反応する。

「はい！ あ、でも……」

笑顔が途端に沈んだ表情に変わり、カルラが言い淀む。そのわけをアルヴィスは知っていたので、すぐに言葉を返す。

「心配すんな。こう見えても俺は結構持ってる」

口角を吊り上げてそう言うと、アルヴィスは肩に掛けた荷袋から

膨れ上がった巾着を取り出すと、その口を縛る紐を解いて中を見せる。

「ほらな？」

黄金色に輝きを放つその中身を、カルラは口をあけて眺めていたが、アルヴィスは再び紐を締め、荷袋の中に戻す。大金をいつまでも見せびらかすのは頭のよい行動ではなかった。

以前、滞在していた街で開催された剣闘大会で見事優勝したアルヴィスは、身に余るその賞金にほとんど手をつけていなかった。

先に宿を取り、その近くの店で食事を済ませた二人は、予約しておいた部屋の中にいた。壁の四隅とテーブルの上、そしてベッドの間に置かれたろうそくの火が部屋を淡く照らす。建物の二階に位置するその部屋の窓からは、すでに明かりのついている建物はあまり見えなかった。

「ほんとに一緒に部屋でよかったのか？」

ソファアーに腰掛けてくつろぎながらアルヴィスが声を放つ。

「はい！ なんの問題ありません！」

窓から外を眺めていたカルラが振り返り、笑顔で言う。

「あ、そう……」

アルヴィスは小さく嘆息した。

先刻、下の階でこの主人に部屋を頼む際、アルヴィスはカルラの存在を忘れ、いつもの調子で一部屋だけしか取らなかった。その

ことを飯を食べている途中に気づき、あわてて訂正しに行こうとしたが、「私は気にしませんから」とカルラに止められた。

部屋に入り、ベッドが二つあることに安心したが、二人並んで予約を取りに行ったのだから当然であった。

カルラが気にしないというのに、男の自分が気するのは情けない話だと思い、アルヴィスはこれ以上このことには触れなかった。

アルヴィスはまた小さく嘆息すると、立ち上がって壁に立て掛けた剣を手取る。

「カルラ、明日は早いからもう身体拭いて寝ろ」

言われたカルラは答えず、眉をひそめて無言で問いかけてくる。

「俺はちよつと用事があるんだ。すぐ戻るよ」

カルラは少し不安げな表情を浮かべたが、すぐに笑顔で「はい！」と答えた。

部屋に設置されたろうそくの火を一つだけ残して他をすべて消しながら、カルラに絶対外に出ないよう、そして誰が来ても鍵を開けないように言い、アルヴィスはランタン片手に外から鍵をかけて階段を下りていった。

宿の外に出ると、日中に暖められた空気が幾分冷やされ、心地よい風が吹いていた。

未だにろうそくの無駄遣いをしている建物がちらほらあったが、日中の賑やかさは無く、街はほとんど静けさに包まれていた。

「俺になんか用か？ それともカルラかな」

アルヴィスは暗闇に向かって声を投げる。正確に言えば、暗闇の向こうに感じる気配に向けて、である。

「見つめられんの好きじゃなくてね。やめてくんねーか？」
ふざけた口調で言うアルヴィスの表情は真剣である。

「……いつから気付いていた？」

建物の影から剣を携えた銀髪の若い男が姿を現してアルヴィスの前まで近寄る。アルヴィスと同じか、少し若いぐらいの、目つきの鋭い男であった。

「この街入ってからだけど？」

街に入ってから尾けられているのは気づいていたが、殺気を全く感じなかったためにアルヴィスは無視していた。しかし、寝ているときに襲われたらたまったもんじゃないので、わざわざ話をしに出てきたのであった。

「ほう。さすが、と言ったところか。……さすが、わたしの孫弟子だ」

「あ？」

アルヴィスはその言葉の意味が全くわからず、眉根を寄せる。

「ギエンに剣を教えたのはわたしだ」

「な、なんだと？」

アルヴィスは狼狽した。

ギエン・ダ・レスコフ。

アルヴィスはその名を知っていた。

尊敬し、慕い、そして目標としていた、アルヴィスの師である男の名前であった。

八年前、親も家も村も全てを失ったアルヴィスに、剣を与え、力を与え、愛を与え、居場所を与えてくれた男の名前であった。

そして、……自分が殺してしまった、師の名前であつた。

「でたらめ言うんじゃないよ」

動揺する気持ちを無理やり抑えて男を睨みつける。

「あの人が剣を教わったのは三十年以上も昔の話だ」
表情を少しも変えない男を睨み続けながらアルヴィスは言う。

ギエンが一度だけ自分の師について語ってくれたことがあつた。
剣の腕はもちろんだったが、それ以上に軍略に長けていたと言っていた。膨大な知識と経験、そして鋭い勘、洞察力、そのすべてが常人の比ではない、とも言っていた。

しかし、ギエンがその人に最期に会ったのは二十年以上前だと悲しそうに話していたのをアルヴィスは覚えていた。

「でたらめではない。確かにギエンに剣を教えたのもそれぐらい前だったかな」

少し口角を吊り上げて笑うその男の表情は、どこか寂しげに思えた。

「わたしは昔、ある男に時を止められてな、こんななりだが貴様の想像よりはるかに長く生きておるぞ」

そう言つて、似合わない不気味な笑みをこぼす。

「時を止められた、だと？ んな」

「ばかな話だと思うか？」

言葉を横取りされたアルヴィスが言葉に詰まる。そんな話聞いたことは無かったが、ありえないと言い切る自信が無いのも確かであった。

「あんた俺の能力のこと知ってんのか？」

アルヴィスは一旦疑うことをやめて、話を進めることにした。

「ああ。だが、今話すべきことはそれではない」

男は目を尖らせてわずかに声に力を込めた。

「貴様、託宣のことを聞いたか？」

「いや、カルラが関係してるってこと以外は知らん」

相手のペースで話を進められるのは不本意ではあったが、不思議と口でこの男に勝てる気がちつとも沸かなかった。

「あの子もそうだが、この話の主役はお前だ」

男はちらつと宿のほうに視線をやり、再びアルヴィスの左眼を見つめる。

「どういうことだ？」

さっぱり意味がわからず眉をひそめる。

「託宣は、貴様とあの子が先頭に立って帝国を滅ぼすと告げた」

「なに？」

短く淡々と話す内容はアルヴィスを狼狽させた。

「耳が悪いのか、はたまた頭が悪いのか。もう一度言おうか？」

「信じられるかよそんな話！ 大体、カルラは治癒能力しかねーんだぞ」

辺りの静けさのせいで少し張った声が騒音のように響く。しかし、アルヴィスはそのこと以上にカルラの能力について話してしまったことをあわてた。知られてまずいことかどうかはまだ判断できないが、初対面の人間に喋り過ぎたことを後悔した。

男は小さく嘆息して、再び口を開く。

「あの子は魔人族の中でも特別なんだ。絶対に死なせてはならん」

表情を変えることも無く言う男にアルヴィスは素直に驚き、すぐに呆れたように息を吐く。

「えらい物知りの青年だ」

もう完全にこの男の話に抗うことを諦めたアルヴィスは嫌味を言いながらも続きを待った。

（全部聞いて、それから判断すればいいか）

「あの子には神を殺す力がある」

「神を殺す力……？ そりゃまた物騒な力だな」

いまいち想像の付かなかったアルヴィスは曖昧に笑う。

「貴様の能力も消せるはずだがな」

「何だと!？」

自分の能力が神の力だなんて思いもしていなかったアルヴィスが再び声を張り上げる。

「だがその前にまず帝国だ。貴様の能力はなかなか使えるからな」
男は少し口角を上げて笑い、それを見てアルヴィスも苦笑する。

「貴様はこれからあの子を守り、仲間を集めろ。わたしはまだ調べることがある」

「おいおいおい、話は聞いてやったがまだ完全に納得はしてねーぞ！」

見た目が年下の人間に命令されるのは少々頭にくる。

「なら好きにしろ。貴様はその能力と帝国の刺客に追われる日々を

送るんだな」

男はいやらしく笑うが、アルヴィスは顔をしかめるだけで何も言
い返せなかった。

「わたしはマーズだ。また時が来れば会いにくる」

男はそう言い残すと、銀色の髪を揺らして夜の闇へと消えていっ
た。

アルヴィスは舌打ちしながら男が消えていった闇を睨んだ。

成立

アルヴィスは足音を立てないように気をつけながら、自分の部屋のある二階への階段を上っていた。

相手が敵であればさくつと終わらせて戻るつもりだったが、少々長話をしたおかげで戻るのがすっかり遅れてしまった。

部屋の前に到着したアルヴィスは、寝ているであろうカルラを起こさないよう慎重に鍵を開ける。

（まるで泥棒だな）

そつと扉を開けた瞬間、中から勢いよくカルラが飛び出してきた。アルヴィスのみぞおちに頭突きをかます。もろに入ったので手にしたランタンを落としそうになる。カルラはそのまま顔をうずめて抱きしめるように腕をアルヴィスの背中に戻す。その肩が少し震えていた。

「……カ、カルラ？」

何がどうなっているのかさっぱり理解できないアルヴィスは、しどろもどろしながら声をかける。

「……はい」

少し湿った声が返ってくるが、この返答では状況が変わらない上にわからない。

「ええっと、その、どうしたんだ？」

完全に狼狽しきった調子でアルヴィスが現状を打破しようと問いかける。

「……ました」

「え？」

しばらく間が空いた上に声が小さく震えていたので聞き取れなかった。

「アルヴィスさん、すぐ戻るって言いました！」

顔を上げて強い口調で言うカルラの目には涙が滲んでいた。

「あ、ああ、ごめん。悪かった」

素直に謝ったが、カルラは首を横にぶんぶん振る。

「いいえ、もういいんです。こうやってちゃんと戻ってきてくれたんで大丈夫です」

そう言ってしわくちやの笑顔を向けてくる。アルヴィスは困った顔でカルラの頭を優しくなでる。

「とりあえず中に入れてくれ。ここじゃ他の人に迷惑掛かっちゃう」「はい！」

ようやく離れてくれたカルラの後続き部屋に入る。

「悪いんだが予定が大幅に変わりそうなんだ」

ランタンをテーブルに置きながら言うと、ベッドに座ってこっちを見ているカルラが眉をひそめる。

「どうにもカルラが今朝言ってたお願いってのを叶えてやらなきゃならんみたいだね」

カルラは初め、理解できていないような顔をしていたが、急に目を丸くして立ち上がると、今度はいきなり落ち込んだ表情になり、再び腰を下ろす。

（な、なんだ一体？）

今度はアルヴィスが眉をひそめてカルラの言葉を待つ。

「嬉しいですけど、アルヴィスさん言ったじゃないですか、その終わりはどこだ、って」

カルラの行動に得心がいったアルヴィスは小さく苦笑する。

「そういや言ったなそんなこと。それじゃあその後に言ったことも覚えてるか？」

一瞬きよとした表情のカルラが、これから思い出そうと視線を上に乗らせた直後にアルヴィスが答えを口にする。

「俺に帝国を潰せとか言う気か、だよ」

カルラが自分で思い出させてくれなかったことにむっとした表情を一瞬浮かべたが、すぐに驚いたように目を丸くする。

「そ、そんなこと」

「代わりに言ってきた奴がいたんだよ、それが」
笑いながら言うのと、自然にため息が漏れる。

（結局あいつの目的がなんなのかさっぱりだ）

「そういうわけだから、とりあえずカルラは俺が守るよ」

そう言って微笑むと、カルラは顔をほころばせて「はい！」と返事をした。

「そこでだ、条件って言うといやらしいんだが……」

カルラが眉をひそめて見つめてくる。

「ひとつだけ俺も頼みを聞いて欲しいんだ」

卑怯だ。アルヴィスは心底そう思ったが自分を止めることができなかった。

「なんですか？」

なぜか嬉しそうに問いかけるカルラの顔を見てさらに心が痛んだ。

（ま、まあ、俺の能力を消してもらっただけだし別に問題ないだろ）

自分自身に言い訳をして余計に惨めになりながらも、もう進むしかなかった。

「ああ、ええつとだな。……あれ？」

アルヴィスが眉をひそめるのでカルラも眉をひそめる。

（あ、あんにゃろう、結局能力の消し方言わずに消えやがった）

「あー、そうだな、その頼みはカルラを無事を守りきれたときに話すってことでもいいか？」

「はい！ アルヴィスさんの頼みならなんでも聞いちゃいます！」

アルヴィスは短く苦笑すると大きく嘆息した。

（疲れた……）

アルヴィスは流浪の身ゆえ、あまり他人と深く関わりあうことをしてこなかった。特にカルラのような純粹無垢な少女の扱いなど慣れているはずも無く、人と人との付き合いの大変さをしみじみと思ひ知らされていた。

「よし！ 今日はもう寝るぞ。明日の予定は朝話す」

予定はすでにほぼ決まっていたが今から説明する気にもなれなかった。

布団に入るとすぐに眠気が襲ってきた。カルラもすでに眠っているようで小さな寝息を立てていた。

（とりあえず交渉は成立ってことか）

命令

王城の南東にはずらりと並ぶ兵舎が、馬小屋が、そして広大な演習場が存在する。それらを窓から一望できる位置にいくつもの部屋が並び、その区画を鎧宮がいきゅうと総称されている。

帝国滅亡の託宣が下った数日後に、皇帝陛下より魔族殲滅の令が下されてから半月、鎧宮も兵舎も半分近くが主不在の状態となっていた。

軍服に身を包み、癖の無い真っ直ぐな金髪を腰まで垂らし、端麗な容姿を厳しく引き締めた女剣士が、腰に携えた剣を小さく鳴らしながら鎧宮の廊下を大股で歩いていた。

「ダスティン將軍閣下、セレスティーナ・アントネッティ、まいりました！」

扉の前で踵を揃え、凜とした声で言う。

「入りましたえ」

中から男の声が聞こえ、それに従い扉を開ける。

部屋の奥には初老の男がこちらに背を向けて立っていた。

「セレス、お前さんにはこれから一個小隊を率いて北に向かってもらう」

男は背を向けたまま淡々と話す。

「北、と申されますと……」

セレスは腕を後ろに組み、両足を肩幅で開き、重心を身体の中心から動かすことなく、そして表情も全く変えずに尋ねる。

「ランズベルクよりさらに北、国境を越えて、二、三日歩いた山のふもとに魔族のものらしき村を発見したとの連絡が入ったの」

ランズベルク。

カリエスコ帝国の最北端の街で、現在では国境警備強化という名目のもと、中央から派遣された北方遠征軍の駐屯地にもなっている。

「お言葉ですが閣下、国境を越えるのであればマクシーム將軍の隊に任せるのが得策かと」

セレスは声の調子を変えることなく、毅然と言い放つ。

マクシーム・カレリン。

北方遠征軍にて指揮を取っている將軍である。

戦線で数々の武勇を残す名将で、今回の託宣後も、皇帝クロノスが唯一危惧する大国・ケセンビア王国の侵攻を防ぐべく、真っ先に北への遠征に名乗り出たのであった。

「今回の魔人族の情報を得たのは我輩が出した兵なのだ。マクシームの奴にこの手柄をくれてやることもあるまい」

ダステインは首だけでこちらを向き、齒を剥いていやらしくにたにたと笑う。

セレスは心の中で深いため息を付く。

（相変わらず、この男は己の出世のことしか考えていないのだな）

実際、魔人族殲滅の令が下ってから、他の將軍を出し抜くため、大量の兵を魔人族の村の探索に走らせていた。ニヨヒラという魔人族の集落が他の隊によって殲滅されたという報告を受け、ひとり悔しがっていたのもこの男だ。

「しかし閣下、それならばせめて一個大隊を率いる許可を。小隊ひとつで魔人相手に殲滅作戦は無謀です。それにケセンビア軍に見つ

かりでもしたら」

感情を表に出さぬように心がけながらも、もったもなことを言っていると思っていた。

帝国に牙を剥く魔人族。異能の力で神をも殺すとまで言われる恐ろしい者達の巢窟に、たかだか百人足らずの兵でどうにかなると思えなかった。

「心配いらぬよ。魔人族といえど、特殊な能力を使えるのはほんの一部の者らしいわい。それに大隊など出せば、それこそケンピアに見つかってしまうわ」

セレスは表情を変えずに奥歯を噛み締めた。

大隊規模の兵を出せば移動にやたらと時間を食ってしまう。そんなことをしているうちに他の隊に戦果を横取りされるのが嫌なのであろう。その上、食料などで費用もかかってしまう。

（部下の命よりも金と名誉か……）

「我輩はお前さんを信頼しておるのだ」

ダスティンは口角を吊り上げ、粘りつくような目つきでセレスをねめ回す。

（言ってくれる）

「出発は明朝、人選はお前さんに任せる。失敗は許されんことを肝に銘じておくのだな」

「はっ！」

踵を揃え敬礼すると、セレスは向きを変え扉に向かって歩き出す。

セレスは廊下に出ると小さく嘆息した。が、すぐに表情を引き締

めなおし、人選について考えながら歩き出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0588z/>

俺は俺を殺すお前を生かす

2011年12月14日04時47分発行